

「都会の少年スポーツく中学生の選択く」

早稲田大学大学院政治学研究所ジャーナリズムコース修士一年

佐藤 哲也

【川崎中央リトルシニア・切手良太選手】

二〇〇八年一月二四日月曜日、午前五時五三分。振替休日となったこの日は、三連休の最終日だ。東からほんの少しだけ明かりが差してきたが、空はまだ暗く、月も星もはっきり見える。天気予報は晴れのち雨。午後の降水確率は九〇%。しかし、今のところまだ雲ひとつ見えない。

待ち合わせをしていた場所に、彼は坂の下から練習試合用のユニフォームに薄手のウィンドブレーカを着て現れた。切手良太君（一二歳）といい、硬式野球クラブチーム・川崎中央リトルシニアに所属する野球選手である。東京都新宿区在住で、両親と兄、姉の五人家族だ。中学一年生男子の平均身長一五二・六cm、体重四四・九kg（平成一八年度学校保健統計調査速報）に比すれば、一六三cm、五三kgという体格は大きい方だが、硬式野球のチームに所属する中学生としては、平均的といってよい。



野球は小学一年生から始めた。「初めはサッカーがよかったが、母の勧めで野球の練習に行ってみたら楽しかった」そうだ。普段はお調子者でやんちゃな一面も持つが、明るくて思いやりがあり、いつも友達に囲まれている。「先輩の前ではおとなしいが、同学年の仲間同士では元気。練習でもふざけるところがあるが、明るいからいい」とは、チームメイトの評である。

一年生を指導している亀澤英樹コーチ（四八歳）は、「守備はいい方だと思います。守りの時の投げ方はいい。打つ方はちょっと癖がありますね」と指摘する。まだ一年生なので、技術的に伴っていないところが多いそうだ。他の指導者もチーム内での彼を、「表面的にはおとなしくあまり目立たないが、芯の強い、自分を持っている選手」と話していた。

この日は五時起床だった。朝食は、しらすごはん一膳と牛乳、それに「昨日がお兄ちゃん誕生日だった」ために買ってあったというケーキを食べた。起きて一時間も経たないため、「まだまだ眠い」。

JR山手線の新大久保駅まで自転車で行く。六時ちょうどに駅に着き、電車に乗り込んだ。休日の早朝にもかかわらず、空席はほとんど見られない。「いつもなんとなく」座らないと言って、野球バッグとバットを床に置き、ドア付近に立ったまま窓の外を眺める。時折、携帯をいじったり、目をこすったりする。普段とは違い、今日はだいたい口数が少ない。移動中は、その日の練習や試合のイメージトレーニングをしているそうだ。

車内を見渡したが、ほかに野球選手の姿は見えない。このシーズンにして、この時間はさすがに早い。普段は八時半集合だが、今日はオープン戦のため、いつもより一時間早くなった。一年生は先輩より先に到着しなければならなかったため、「集合時間の二〇分前には着きたい」という。グラウンドは、神奈川県川崎市幸区にある多摩川河川敷球場（通称・上平間グラウンド）だ。渋谷駅で東急東横線に乗り換え、武蔵小杉駅からはさらにバスに乗り換える。家を出てからグラウンドに着くまでの移動時間は、一時間半に及ぶ。

「今日は試合に出られるかわからないな……」

滅多に見せない不安そうな顔でつぶやいた。

多摩川を渡る頃、空はだいぶ白みを帯びてきた。

【「偉大」な兄の背中を追い掛けて】

六時三〇分に武蔵小杉駅に着き、バス停に向かう。途中、切手君の携帯に、母親から無事に着いたことを確認する電話が掛かる。

「いつもここで待つんだよ」

バスは二〇分待ちだった。日は差しているが、目の前まで冬が訪れている一二月の末だ。七時前では十分寒い。自動販売機でホットココアを買って、手を温めながら飲み出した。

川崎中央リトルシニアに限らず、中学野球のクラブチームの活動は、土日祝日が中心である。この日は三日連続練習の最終日で、疲れが「少し」残っているようだ。一昨日は、上平間グラウンドでの通常練習。昨日は、グラウンド借用の関係で、一年生は等々力にある室内練習場での体力トレーニングだった。

川崎中央への入団は、すんなりと決めたわけではない。軟式チームか他の硬式チームにするかどうか迷ったという。しかし、「川崎中央の練習に行ってみたら、コーチもよくて、行きたいと思いました」と入団を決めた。「東京の外に出ることは、特に意識しなかった」というが、その選択には兄の存在が影響していたはずだ。

兄の孝太さん（一七歳）は、現在高校二年生で、川崎中央のOBである。在籍時にはキャプテンを務め、全国大会出場も果たした。卒団後、新潟県の日本文理高校へ野球留学し、今夏から一番ショートのレギュラーの座をつかんだ。新チームでは副キャプテンを任せられ、秋の北信越大会で見事に優勝し、二〇〇九年春の甲子園出場を「当確」としている。

「明るくて人に好かれるタイプ。下の子を引っ張っていける力があつた」と、川崎中央の指導者たちは評している。現役の選手たちも、「先輩にやさしくて、教え方もうまい。みんなから信頼されていて、見習うべきところが多い先輩」と話す。その「偉大」な兄の背中を追って、切手君は毎週末、川崎へ通う。

バスを待っているのと、同じ新宿区から来ているチームメイトと合流した。今年の一年生で新宿から通っているのは二人だけだ。

六時五四分、やっとバスが来た。最後部に座り、揺られること一二分。最寄りのバス停から五分ほど歩いて、予定より二〇分早い七時一〇分に到着した。オレンジ色の朝日がまぶしい。

「じゃあ!」と、切手君はグラウンドに降りていった。一年生がグラウンド整備を始め出すと、続々と選手が集まってきた。自転車で来る選手も数名いる。

土手から眺めると、話には聞いていたが、あらためてとても恵まれた環境にあることを知る。「多摩川の河川敷にしては一番奥行きがある」という広い野球グラウンドの脇には、四〇〇mのトラックがある。ジョギングやサイクリングなどを楽しむ人の姿も見られる。チームはここ以外にも、雨天用に等々力の室内練習場を確保してある。

ほどなく、今日の対戦相手、武蔵野リトルシニアの選手たちが到着した。グラウンド整備を終えた川崎中央ナインも、一年生と二年生に分かれてアップを始める。九時一五分に、二年生同士の第一試合が始まった。



【新宿区の中学スポーツを取り巻く環境】

切手君の野球を巡る一日についてはひとまず筆を置き、ここで新宿区の中学スポーツを取り巻く環境について触れておきたい。

新宿区は大都会東京のど真ん中にある。人工的な都市環境の中で、子どもたちはどのようにスポーツをしているのだろうか。

都会っ子というと、一般的にひ弱で勉強ばかりしているというステレオタイプのイメージがある。また、広いグラウンドに乏しく、公園などでは投球禁止の看板が掲げられていたり、スポーツをする環境には恵まれていない。それでも、ユニフォーム姿の小学生が小さな公園で野球やサッカーの練習をしている光景を見かけることはある。しかし、中学生に至っては、そうした練習風景すら見かけることはほとんどない。

国土交通省の「都市公園データベース」によれば、「都道府県別一人当たり都市公園等整備現況」(平成一九年三月三十一日現在)は、全国九・三、東京都六・五、特別区二・九(単位は、㎡/人)となっている。これに対して、新宿区内公園は一・九二である。(平成二〇年現在、新宿区みどり公園課調べ。国民公園一・九を除く)区立公園数は一八三あるが、野球ができるのはこの中の三カ所のみ。うち一カ所は、「小学生まで」という制限が付いている。六七割は、一〇〇〇㎡未満の「キヤッチボールとベンチの切り分けすらできない」小さな公園だ。

区内に二カ所ある都立戸山公園と明治公園は、それなりの広さを持っており、少年野球やサッカーの練習を見かける。しかし、管理している都立東部公園事務所に問い合わせると、「原則的にはキヤッチボール程度のものでしか認めておらず、練習や試合形式のものとは不可」とのことであった。少年野球の練習は、「軟式野球連盟が自主的な管理をおこなっているもの」で、それを「黙認」しているのが現状だ。「野球などは独占排他的になるため、公園では誰でも自由に遊べるようにしたい」という考えから、このような管理になっているという。

子どもがスポーツに取り組む”きっかけ”について、体育教育を研究している新宿区立落合第一小学校・田郷岡正秀副校長は、「グラウンドなどのインフラはあくまで十分条件であり、根幹はこの地域であつても差はない」と話す。

「本格的にスポーツを始める”きっかけ”は、指導者の存在や声掛けだったり、スポーツ選手などの影響だったりします。小学生の場合は、むしろ生涯体育という観点から、運動や身体的機能が高まる心地良さ、友達と何かをすることの楽しさなど、理屈ではないことを学んでいければよいのではないのでしょうか。新宿区内で技術水準が高い子どもたちであつても、この部分は変わらないですね」

また、平成一一年度文部省体育実技指導資料集『体づくり運動』の手引作成委員を務めた、新宿区立西新宿中学校・大友照典副校長は、新宿区の中学生スポーツについて、「学校の部活動ではなく、地域のクラブチームが中心となっているのが特色」と分析する。

「新宿区の中学生は『落ち着いている』と言われているので、先生方の年齢が相対的に高い傾向があります。また、昔からの流れもあつて、部活動はそれほど盛んではないです。加えて、平成一五年度から導入された主幹制度（主幹になると、異動年限が延長される）により、さらに年齢が高くなる傾向があります。そして、異動年限の長さゆえに、他の地域から新しい人材が入らなくなっているというのが現状です」

近隣の区の代表が集まって開催されるブロック大会や東京都大会では、どの部活動も相対的に弱く、個人戦以外ではほとんど勝てないそう。そのため、小学校からの競技経験者は、学校の部活動ではなく、交通の便を活かして、たとえば硬式の野球チームやサッカーチームなど、違う地域のクラブチームに入ることになる。もっとも、これは「新宿区の限界」というだけではなく、「小学校からやっているの、クラブチームで続けた方がいい」という見方もできるそう。

子どもの体力自体も、新宿区は総じて低いという。学習指導要領で保健体育が九〇時間減った（平成二四年度に再び一〇五時間に戻る）ため、「削らざるを得ない状況になった」こともあり、スポーツテストをやっている中学校は半分しかない。

遊び場に関していえば、広いグラウンドがあつたとしても、そこで遊んだりスポーツをするかどうかは別問題だ。「部活に入っていない生徒や、入っている生徒でも、部活がない日に公園などでスポーツをやっているという話は聞かない」そう。むしろ、ゲームセンターやカラオケ、プリクラなど他の遊びをしたり、生徒によっては、歌舞伎町や六本木などの繁華街に繰り出す子どももいる。

【魔力に取り付かれるスポーツ選手たち】

このような中学生を取り巻く環境の中で、小学生の時に楽しさを覚えたスポーツに、さらなる飛躍と競技力の向上を目指し、スポーツ選手としての自分にその先の夢を追う子どもは、それをどこでどうつなげているのか。そこにはどのような世界があるのか。十分条件だったインフラが必要条件に変わった時、彼らはどのような選択を迫られ、何を犠牲に強いられるのだろうか。

私自身を振り返ってみると、中学時代は、福島県いわき市の公立中学校野球部に所属し、広いグラウンドでのびのびと野球に打ち込んでいた。当時の福島県には、中学生の硬式野球クラブチームはなく、私立中学校もなかったもので、県内の野球少年は皆、公立中学校の野球部に入らなければならなかった。東北の片田舎で、家から徒歩一〇分の学校に、縦横一〇〇m以上ある校庭という恵まれた環境だった。

所属していた野球部は、同級生の中から甲子園に出場する選手が二人も出るという非常にレベルの高いチームだった。盆と正月しか休みがなかった練習は、毎日ボールが見えなくなるまで続いた。入学時は同学年だけで四〇人もいた部員が、最後には二人にまで減るほど、練習は厳しかった。それでもあの頃の私は、野球がしたくてしたくてたまらなかった。三年生最後の夏、県大会の準決勝で敗退し中学野球を終えたが、取り付かれるように練習していた日々を今でも鮮明に覚えている。

時を経て、数年前まで、教育実習の縁で東京都杉並区の公立中学校で三年ほど野球部の指導に携わった。週三日の平日練習に、グラウンドが確保できれば土日にもおこなうという練習スケジュールは、杉並区内ではやや多い程度である。区の大会では上位校だったが、それでも都大会まで進出するのは難しかった。時代も土地柄も違う環境で、野球指導を通じて子どもたちを見つめ、自分の中学時代の野球とを対比させて懐かしく思いながら、スポーツ指導の楽しさと難しさを実感した。

そして現在は、新宿区の区立児童館職員として、小中学生に児童指導、及びスポーツ指導をしている。野球こそ教えることはなくなったが、子どもとスポーツの環境を考えることに変わりはない。

こうした経験を通じて、新宿区の子どもを取り巻く環境、小中学生のスポーツ選手の実態、その先の進路と隣り合わせの問題に対して大きな関心を持つようになった。

スポーツは、生涯体育としての楽しさを味わうことはもちろん大切だが、それがすべてではない。特に学生スポーツでは、競技生活に入ると、それなしでは生活さえ考えられないほどに惹きつけられ、犠牲や代償を払ってでものめり込んでしまう魔力に魅せられる。

学校においては、部活動はあくまで特別活動のひとつでしかない。しかし、環境に恵まれない中で、スポーツに“特別活動以上”を求める選手たちが惹きつけられているものを垣間見るべく、新宿区の三人の中学生を追った。

【新宿区の中学生硬式野球クラブ】

梅雨は明けたものの、すっきりしない空模様と蒸し暑さに、どことない気だるさを感じる二〇〇八年七月最終週の土曜日。私は、自宅のある杉並区から、葛飾区東金町にある江戸川ライン球場（通称・葛飾グラウンド）に向かって、環状八号線を東進していた。東京都区内を西から東へ横断することになる。部屋を出たのは午前一〇時二〇分。昼までに間に合うと見ていたが、思いのほか時間が掛かり、着いたのは正午を一〇分以上回っていた。原付バイクだったとはいえ、その時間と距離に、取材前から疲労感を覚えた。葛飾区はさすがに遠い。川の向こうは埼玉県だ。



江戸川の土手を登ると、二〇面を取れる野球場と一八番ホールまであるゴルフコース、二八〇ヤードのゴルフ練習場が、河川敷いっぱい、それこそ端は霞んで一望できないくらい広がっている。見下ろすと、中学生の野球チームが二チーム練習しているのが目に飛び込んできた。近隣にある荒川区のチームと、今回、取材を依頼した新宿リトルシニアである。

新宿区には、公立一一校、私立六校（女子中学校二校を含む）、計一七校の中学校がある。このうち野球部を持っているのは、公立が五校、私立が三校である。また、中学生の野球クラブチームは、軟式クラブが四チーム、硬式クラブが二チームだ。

その硬式クラブのひとつである新宿リトルシニアは、新宿区在住の子どもが中心というだけで、実際には他区や他県の選手も所属している。それに活動の拠点となる練習場は、新宿区内にはない。メイングラウンドは、ここ葛飾グラウンドである。

ここまで来るには二通りある。ひとつは、公共の交通機関を使う方法だ。新宿区から電車とバスを乗り継ぎ、移動時間は家を出るところから計ると、優に一時半を超え。もうひとつは、保護者が出す車に分乗する方法である。これだと一時間以内で着ける。比較的楽だが、車を出してくれる保護者の数は限られているため、基本的には電車とバスを使うことになる。そして、これがほぼ毎週末である。その負担に耐えて練習に通う選手たちの野球に対する意欲のほどがうかがえる。

河川敷に降り立つと、強い川風にさらされた。後で、インタビューに使ったICレコーダを再生してみると、マイクに当たる風のうなりで、口元に近づけて録音していたはずの音声が聞き取りにくかったくらいである。

全国大会を一週間後に控えたこの日の練習だったが、ユニフォーム姿の少年たちがボールを追うグラウンドは、蒸し暑さを吹き飛ばすかのような掛け声と全力疾走、それに大会前に特有の緊張感に包まれていた。

チームを率いて五年目になる緒方将介監督（三七歳）は、中学野球を「高校、大学と散っても、中学までは地元なので、最後には帰って来られるふりさとのような場所」と考えている。挨拶・礼儀を重んじ、野球を通して社会に適応できるチーム作りがモットーだ。チームの選手の九割は、新宿区在住の中学生である。軟式経験者が多く、その先にある高校野球を見据えて入団してくるという。卒団後は、茨城、埼玉、千葉、静岡など関東近県の高校に進む。

「東京の有力な学校は、学校が都心でもグラウンドは地方。電車で往復三時間も掛かったりする。この場合は、地方に行ったり、寮に入ったりする方が野球をやる上ではよいです」

都内で通学しながら野球をやると、強豪校では、帰宅が夜の一時を回る事が当たり前になる。時間的なロスだけではなく、基本である身体作りができなくなってしまう。こうしたことを踏まえた上で、スカウトもあるが、基本的には、子どもの性格や技術、将来の目標などを考えた高校を勧めている。

「高校への進学というのは、将来に関わる人生の中での最初の分岐点。選手たちには、なぜ休みの日に辛い練習をやっているのかを問いかけるようにしています」

大会などで他のシニアチームと試合をすると、「新宿（シニア）は、どこで練習してるの？ ナイターだけ？」と言われることがあるそうだ。

「バットを振りに公園に行けば怒られる。ボールを投げれば怒られるという地域の中でやっている子どもたちを、小さな池から大海に出してあげたい」

目標は、全国大会で勝つことだ。

【新宿リトルシニア・栗山隼選手】

バックネット裏に日よけ用のテントを張って設けられた監督席の隣で、練習の合間に数名の選手と保護者にインタビューをさせてもらった。

栗山隼君（一四歳）は、新宿区に住む中学二年生。「お恥ずかしい上にどんぶり飯三杯を食べるように」というチームの食生活指導により、中学生ながら身長一七〇cm、体重六〇kgを超える大型の選手が何人もいる同チームにおいて、一六九cm、五八kgというのは平均的な体型だ。真っ黒に日焼けした顔には、野球に打ち込む精悍さと、時折はにかむ表情が見せるあどけなさが同居する。

野球は五歳から始めた。物心がついた頃から二人の兄が共に野球をしていたので、他のスポーツの選択肢は目に入らなかったそうだ。取材した時点でのポジションは外野で、主にレフト。打順は七番を打つことが多い。チームメイトからは、

「責任感が強く、何事にも真面目に取り組む選手」と評価されている。

栗山君は中学に入るにあたり、硬式と軟式、どちらのクラブチームにするか迷ったという。

「小学校時代のチームの指導者に、『お前には力があるから、挑戦してみなさい』と、新宿リトルシニアを勧められ、いいチームだったので選びました」

学校の部活動は行事などで何かと休みになるが、クラブチームは多少の雨なら練習するところなどもよかったという。普通は練習が休みになると喜ぶ選手が多いが、逆にこのくらいの気持ちでなければ、厳しい環境の中で競技生活を続けていくことは難しい。栗山君自身も、「好きなことをするためには何かしらの代償を払わなければならない」と覚悟を決めている。

また、新宿区には中学生がプレーできる硬式の野球グラウンドがないことを嘆く一方で、「（練習試合なども含めて）いろいろなグラウンドでプレーできるチャンスがある分、試合でも、自分たちが一番グラウンド状態を見極められるチームだと思っています」と話した。本来であれば逆境であるはずの困難をこれだけ前向きに捉えられる気持ちは、簡単に育つものではない。

母親の優子さん（五三歳）は、中学での選択において、保護者の思いとチームの方向性が合っていたという。

「もちろん本人の希望が第一でしたが、チームプレーや相手への思いやりなど、人間としての基本的な部分を育ててもらえるというところで、このチームがよいと判断しました」

取材当日、優子さんはご主人と共に、選手用と道具運搬用の車を二台出している。とにかく子どもが野球をしている姿を見たいので、そうしたことも苦にならないようだ。

しかし、今でこそ週末に子どもの練習を見ることができているが、一年後には、否が応にも進路を考えなければならぬ。力のある選手であれば、地方の高校からの誘いも舞い込む。

優子さんは、野球留学という選択について、母親としての苦しい胸の内を明かしてくれた。「子どもが親を必要とした時に、すぐに行けないのは、親としてはつらいものがあります。ただ、子どもが納得して行きたいという意味が固いのであれば、その高校に行かせてあげたい。耐えられるだけの強い精神力が作られるのなら、社会に出て通用する人間になれるかもしれない」

結局は本人が決めることだが、所詮は子どもなので、できる限りのことはしてあげたいと思う。

「将来はプロ野球選手になりたい」という栗山君に、「野球留学をする気持ちはあるか」と尋ねてみると、意外な答えが返ってきた。

「自分は、生まれ育ったところで今まで支えてくれた人たちに恩返しをしたいので、野球留学はしたくないです」

地方の高校の方が、レベルや参加校数を考えれば甲子園にも出やすいし、将来が開かれる可能性は高くなる。「地方に行った方が、夢であるプロ野球選手にも近づけるのでは？」と聞いてみると、はっきりとした口調で、「地元の方が、今まで一緒にやってきた人たちが応援に来てくれる。その方がうれしい。それに、東京はチーム数が多いから、優勝できたら地方よりも達成感がありそうなので……」と語った。

将来の夢である高いレベルでの野球以上に、人とのつながりを大事にしていきたい。あどけなさが残る一四歳の素直な気持ちだ。

代償を払ってでも野球をしたいという気持ち。野球から得られる成長と喜び。

新宿リトルシニアは、今夏、三年生最後の選手権大会で、全国大会出場を果たした。今秋の関東大会でもベスト4に入り、春の全国出場も決めている。

【新宿区立落合第二中学校女子ソフトボール部・深澤未花選手】

学区域外の学校に入学してでもスポーツを続けたいという選手がいる。

新宿区立落合第二中学校女子ソフトボール部に所属する一年生の深澤未花さん（一二歳）は、小学校時代には、水泳、バレーボール、卓球など、さまざまなスポーツに挑戦してきた。短距離走も速く、運動会では毎年リレーの選手に選ばれた。一六三cmの身長に女子中学生としては広めの肩幅をしている。日に焼けた顔は、否が応にも彼女がスポーツ選手であることを連想させる。

ソフトボールは、小学三年生から始めた。「友達に誘われた」のがきっかけだった。ポジションはキャッチャーで、打順はクリーンアップ。明るくて誰からも好かれる性格も、彼女

をチームの中心選手に押し上げている。

小学校時代に所属していた地元のチームからは、今年、深澤さんも含めて五人が同校に入学した。全員がソフトボール部所属である。「例年、学区域外からの入部がある」とのことだが、入学すれば、当然、毎日通学することになる。

「他のスポーツの可能性もあったはず。なのに、どうしてこれだけ困難な環境を乗り越えてまで、ソフトボールをやりたいのか」と尋ねると、深澤さんはひとこと答えた。「楽しいから。ただそれだけです」

二〇〇八年一月第四週目の土曜日。私は仕事の関係で、午前中に深澤さんが通っていた小学校で開かれていた学芸会を鑑賞していた。この日のソフトボール部の練習開始予定時刻は午後一時だ。「先生の都合」により、午前の練習はカットされた。終わってすぐに自転車にまたがり、小学校を後にしたのは午後二時三〇分過ぎ。大急ぎで落合第二中学校へ向かった。汗をかきながらペダルを漕ぎ続けること約二五分。ぎりぎり間に合った。

新宿区は東西約六kmに及ぶが、深澤さんが住む戸山地区からここまでは、直線距離で優に三kmを超える。区立中学校で自転車通学は原則的に認められないため、通学は、途中で乗り換えを挟んで七駅ある地下鉄と徒歩で、片道四五分掛かる。

この日は雲ひとつない澄み切った空で、明るい日差しが気持ちいい。午前中にいた体育館よりこちらの校庭の方が暖かい。「よろしくお願いします」と、ソフトボール部を率いて六年目になる同校教諭の毛利慎治先生(三二歳)が校庭へ案内してくれた。

ほぼ正方形の校庭は、一辺が六〇m以上ある。落合地区は都心部からは離れた閑静な住宅地だが、新宿区の学校としては広い方だ。見渡すと、かなりの数のネットが目についた。数えてみると、縦横三メートルある防球用のいわゆる「中ネット」が、なんと二九基もある。これ以外にも、ティーンズネットが合計一六基あった。



私が数年前まで指導していた杉並区立の中学校野球部は、公式戦の試合会場にもなるくらい恵まれた広さの校庭を持っていたが、ネットは中小合わせても一〇基もなかった。他の地域の学校もいろいろ訪れているが、これだけ持っている学校は見たことがない。新宿区は税財源で他区よりも潤いがあり、特に同校では区内の他校と比べても部活動への配当予算が多いのだという。

ほかに、きれいに揃えられたヘルメットは一四個。バットは一六本あった。もちろん毎年少しずつ揃えてきたそうだが、ソフトボール用のバッティングマシンだけは、「前顧問の先生の私費で購入したもの」だ。

練習メニューの確認をした後、「ファイト、オーツ！」と、弾けるような掛け声と共に練習が始まった。「期末試験の後なので全体的に動きが悪い」というが、それでもスポーツ選手のかききびとした動作は、見ていて気持ちがいい。

平日はサッカー部、テニス部と兼用するこの広い校庭も、土日はソフトボール部が占有して練習している。今日は、二年生四人、一年生九人、合計一三人の部員が欠けることなく参

加した。ソフトボール部員と先生、それに私以外には誰もいない校庭に、選手の掛け声とスパイクが地面を蹴り上げる音だけが響く。

練習を横目に見ながら、先生に話を聞いた。

【新宿区のソフトボール部と女子スポーツ選手】

落合第二中学校女子ソフトボール部は、創部して十数年になる。現在、新宿区内にソフトボール部を持つ学校は、私立が二校、公立が二校しかない。うち、公立の二校は部員が一人しかおらず、休部状態とのことだ。新宿区内の学校では大会ができないので、公式戦は、第二学区（新宿・渋谷・目黒・世田谷）の約二二チームによるブロック大会から始まることになる。現在、東京都内には、一〇〇近い中学校女子ソフトボールチームがあるが、「私立学校が強く、上位を占める」という勢力図にあつて、公立で常にベスト8をうかがうという強豪チームである。

「プレーヤーの前に中学生として立派になって欲しい」と、努力・謙虚・素直をチーム目標に掲げ、練習の中では、「生徒に考えさせるソフト」を目指している。

チームには、野球やソフトボールの経験者が、ソフトボールがしたくて入部して来る。そのため、技術的には、入部の段階である程度のレベルには達している。興味本位で入部してくる生徒はほとんどいない。卒業生の半数以上は、高校でもソフトボールを続ける意思を持つという。



練習は、月・水・金曜日が、午後四時から六時三〇分くらいまでの夕方練習。火・木曜日が、午前七時二〇分から八時一〇分くらいまでの朝練習。土・日曜日は、毎週、午前九時から午後四時くらいまで練習をしている。夏休みや春休みなどの長期休業期間は、ほとんど毎日の終日練習だ。これだけのハードな練習でありながら、休んだら退部したりする生徒はほとんどいない。

また、スポーツにおいては、男女は体格差以上に、精神的な違いも大きい。

「女子選手は、集団や横並びが好きです。基本的には、横と並んでいないとだめで、指導者が誰かを個人的に教えると良く思わない傾向があります。男子は放っておい

てもうまくなりますが、女子の場合、一人ひとりに手を掛けなければならない中で、その手の掛け方が難しいですね」

毛利先生はさらに、今の子どもたちには、ゴールが見えないことはやらないという傾向があることを指摘する。「こうしたら自分たちの得になるということは、目に見えるようになってあげないといけない」という理詰めで動く性格も、特に女子選手に多いという。

キャッチボールに始まり、捕球・送球時の動作と姿勢の確認、フットワークからボール回しまで一時間半を掛ける。わずか五分程度の給水休憩を終えて、バッティング、内外野ノツ

ク、三〇分近くにも及ぶランニングと練習は続いた。練習後のミーティングを終え、解散となったのは午後五時三〇分。気温も下がり、あたりはもう真つ暗だ。

【「悔しき」という原点】

「小学生の時、最後の都大会で負けて悔しさを味わい、『ここで終わりたくない』という思いが、未花の中にもあったし、友達の中にも沸いてきたんだと思います」

母親の弘美さん（五二歳）は、本人の根底にある気持ちを語った。ソフトボールを始めた当初は、まさか中学校でまでやるとは思っていなかったという。弘美さんがやっているPTAバレーボールチームの練習にもよくついてきており、その選択肢もあったが、ソフトボールの方が始めたのが早く、ルールを覚えていくうちにのめりこんでいったそうだ。

小学生最後の大会の後、「中学に入ってもやりたい」とチームを探したが、近隣の学校にはソフトボール部がなかった。学校説明会などで、部の設立をお願いしたが、中学校の部活動に関しては、「教員が顧問として指導できることが条件になるという点が障害となった。私立の選択もあったが、経済的な理由もあり断念した。最終的に、「小学校時代のチームの先輩が行っていた」という落合第二中学校を選ぶことになった。

中学女子スポーツ選手の最大の困難さは、練習以上に、その行き来にある。夜、遅い時間での帰宅は、保護者にとっては練習内容や移動時間以上の心配である。チームメイト五人で通学することになった分、少しは気持ち的に楽なところもあったとは思われるが、「もし一人だったらどうしたのか」と尋ねてみた。

「本人がどうしてもソフトがやりたいという気持ちが強かったんです。私と兄は、近くの学校を勧めたんですが……。通学も、最初は五人そろって行っていました。慣れてきたせいか一人で行くこともあります。みんな一緒にベストですが、本人の意思を尊重し、一人でも行かせていたと思います」

弘美さんは、部活動を通して、部員と共に何かを成し遂げていこうとする力を身につけ、力を合わせていくことから、達成感や協調性を覚えて欲しいという。私立に比べて、指導体制や設備面で劣る分、競技力以上に、人間的に成長できること、我慢できることなどを求めている。

卒業後の進路については、「遠いし、帰りが遅くて大変だが、勉強をがんばって、できれば高校は都立に行つて欲しい」とのことだが、最終的には、本人の意思を尊重したいという考えだ。

「将来的に、就きたい仕事に就かせてあげたいが、そのための基本的な学力は身につけておいて欲しいです。部活だけに専念してしまうと、両立できなかった時、それで身を立てられなければそこで終わってしまいます。もし高校で本格的にやるなら、それを活かして、たとえば体育系の大学や先生、スポーツのインストラクターなどの選択肢に思いをはせてくれればと思っています。とにかく、偏らない人間になって欲しいです」



スポーツ選手を子に持つ親の率直な願いだ。

毛利先生は深澤さんについて、「身体的・技能的に高く、打つ・投げるが他の選手に比べて秀でている」と見ている。「将来的には、しっかり練習をすれば、ソフトボールの日本リーガーも夢ではない可能性を持っています」と話した。

深澤さんに、希望する進路と将来の夢について聞いた。

「高校は、強いチームに声を掛けてもらって入りたいです。将来は、ソフトの選手になって、テレビに出られるようになりたい。その後、芸能人になりたいです」

一三歳の女子ソフトボール選手が大きな夢に思いをはせて、今日も練習に励む。

【新宿区から川崎市へ】



切手君の野球を巡る一日は続く。

第一試合は接戦の末、八対六で武蔵野が勝った。切手君は、一年生同士の第二試合に、七番センターで先発出場した。

守備は無難にこなしたものの、第一、二打席共に、粘りながらも凡退。五回に回ってきた第三打席で代打を送られ、その後は、バットボーイをしながら、他の選手に声掛けをする。「今、ちようど変声期」と言っていたが、少しかすれた彼の声は、離れて立っていた私の方までよく通った。試合は、最終回に相手投手の乱れに乗じて大量九点を挙げた川崎中央が、一三対七で逆転勝ち。試合終了の頃には、雨がだいぶ激しくなってきた。

そもそも、なぜ川崎市のチームへ新宿区の子どもが来るのだろうか。そこには、就任五年目の澤田健一監督（六〇歳）の存在が関係している。澤田監督が以前、少年野球の監督をしていた頃、東京都の少年野球大会に川崎市代表として招待され、出場していた。その時、「今度、川崎でリトルシニアの監督をやる」と関係者に伝えたことが始まりだった。大会を新宿区でやっていたこともあり、新宿の子どもが多く来るようになったという。「部員に二〇人くらい新宿の子どもがいたので、『川崎中央』じゃなくて、『新宿中央』といわれたこともあった」そうだ。最近はいぶ減ってきたというが、その時の流れで、今でも何人か来ている。「東京にはグラウンドがないですから、硬式ができる場所となると、高島平とか葛飾などに限られてしまうんですね。河川敷があるところで板橋区と埼玉県の境にある戸田橋に行くみたいなの……。東京の子どもが多かったのは、彼らにとって戸田橋に行くか多摩川に行くかの差だけだったと思いますよ」

実際に新宿区からであれば、戸田橋も多摩川も移動に要する時間は変わらない。

しかし、実は川崎市の場合、野球以上にサッカーが盛んな地域としても知られる。この日も河川敷に広がるグラウンドを眺めてみると、野球をやっているのはここだけで、両脇から先は、全部サッカーだ。こちらのグラウンドは、市の軟式野球連盟が、「将来的にも子ども

が野球に関われるように」と、確保してくれているようだ。

山崎清事務局長（五四歳）に、チームの概要などについて聞いた。

川崎中央リトルシニアは、二〇〇〇年に再結成された。それまでは、チームはあったものの、選手は七〜八名で休部状態だった。川崎市内にはもう一つチームがあるが、「地元の学童（小学生）の子どもに、中学で硬式をやらせたい」との思いから、澤田監督と関係者の力でチームが再び動き出した。

「野球が好きなら、技術は問わないようなチームにしたかったんです」

少年野球でのスーパースターの選手はあまりおらず、むしろ「他のチームではやっていくのが厳しい選手」が集まるという。選手間のレベルの差はあるが、地元の川崎市だけではなく、横浜市や新宿区などからも集まり、部員数は近郊のリトルシニアの中でも多いチームとなった。徐々に成績もよくなり、全国でも指折りの強豪チームがひしめき合う南関東支部（神奈川・静岡）を勝ち上がって、全国大会にもこれまで二回出場している。

神奈川といえば、高校野球では、「神奈川を制するものは全国を制す」と言われるくらいに野球の強い地域だが、中学も高校に引っ張られる形でレベルが高い。東京との違いは、「個々の選手のレベルは東京の方が優れているが、チームとしては神奈川の方が強い」そうだ。

川崎市近辺では、硬式はさすがにできるところが限られているが、軟式を使ったキャッチボール程度であれば公園内でもできるなど、ある程度の環境は整っている。

澤田監督は、「中学でレギュラーを取れなくても、高校でレギュラーを取れるように指導している」という。現在の部員数は、二年生二四名、一年生三六名の合計六〇名。かなりの大所帯だ。本人の技術次第とはいえ、この人数の中でレギュラーを獲るのは容易なことではない。

「スポーツは心・技・体です。もちろん技術が上がればいいが、体力がなければ身につかない。高校指導者からも、体力をつけさせて欲しいと言われています。そして、一番大切な心です。礼儀や挨拶、整理整頓といったことを、入り口の段階で厳しく言っています」

また、「野球で飯を喰えるなんてできないから、社会人になった時にきっちりできるように」ということを、普段から指導している。進路においても、「野球で決めるな」と選手と保護者には伝えている。

「高校進学は、人生における岐路。『自分が選んだ学校に野球部があるんだ』という感覚で選ぶように言っています」

リトルシニアの選手たちが直面する特待生制度についても、「野球だけできればよいという制度を設けている高校側の問題」として反対する。実際に、同チームからは、家庭の事情以外で特待生として進学した選手はいないということだ。

【中学生スポーツ選手から見る特待生問題と野球留学】

二〇〇七年、西武ライオンズの裏金問題に端を発し、特待生制度と野球留学が社会問題にまでなった。これらは日本高校野球連盟により、「学生野球憲章第十三条（※）に違反して

いる」と批判された。そして、この問題の当事者となりうるのは、高いレベルで競技生活を継続する中学生の彼らである。

なによりも硬式野球というのは、大変お金が掛かるスポーツである。

山崎事務局長によれば、同チームの部費と選手会費は、合わせて月額九〇〇〇円。この金額は、「公共施設を借りているので」他のチームに比べれば安い方だ。まずこれが年間十二カ月分で十萬八〇〇〇円となる。硬式用の野球用具は高価だ。定価だと、グローブ三万円。バット二万円。スパイク一萬五〇〇〇円。練習用ユニフォーム五〇〇〇円。アップシューズ一万円。成長期の中学生だと、スパイクやアップシューズは、年間一足は変えることになる。他にもアンダーシャツやストッキングなど、枚挙に暇がない。

さらに、練習グラウンドまでの交通費もばかにならない。この日の切手君の交通費は、往復で一〇八〇円。「親の車で移動することもある」そうだが、単純計算すれば、月に一〇回の練習回数としても、一万円近くになる。これらに加えて、合宿や大会参加の際の遠征費用なども入れると、「年間三〇万円は掛かる」とのことだ。

特待生制度と野球留学は表裏一体といってよい。地方の学校が、特待生制度を使って大都市圏の選手を入学させるからだ。この問題に関しては、賛否両論がある。反対派は、主に倫理面から、「私立学校が、地元以外の野球選手をお金で集めて強豪校にし、甲子園に出場することで、高校野球が盛り上がりなくなってしまう。地元の子どもたちが地元の高校に入り、地元の代表として出場するべきだ」と主張する。

本来、高校野球はあくまで高校生部の活動なので、「盛り上がり」という観点からプロ組織のような興行面での成功を考える必要はない。しかし、甲子園を「郷土アイデンティティを強化させる文化的装置」（田中励子『高校野球の社会学』第八章 世界思想社 一九九四年）とする社会学的な観点から見れば、日本においてこれに勝るものはない。すなわち、高校野球は、日本文化のひとつなのだ。そこに盛り上がりや、フェアで平等な「高校生らしさ」という倫理を求めてしまうのはやむを得ない。

一方で、高校で野球を続けるには多額のお金が掛かる。特待生制度がなくなってしまうと、母子家庭などの選手は、高い技術を持ちながらも、「経済的な事情」で野球を断念しなければならなくなる。これは、野球界全体の技術水準の低下を招いてしまうことにもなりかねない問題である。

賛成派は、「私学の経営の観点から必要」や「勉強以外の才能が認められてもよいのではないか」と主張する。そしてその根幹には、「なぜ野球」だけが厳しく問題化されるのか」という言い分がある。これには、その「間」と「先」に問題がある。

「間」にある問題とは、特に関西圏に多いといわれている「高校野球ブローカー」の存在だ。このブローカーとは、中学生チームの監督やコーチなどの指導者であったり、高校と契約しスカウトとして動く元プロ野球選手であったりする。

『高校野球「裏」ビジネス』（軍司貞則 ちくま新書 二〇〇八年）は、「カモは、二流、三流の子供」と指摘する。たとえば、関西の強豪校に入れなかった選手の親に、「九州に懇意にしている学校がある。話をつけるから紹介料を振り込め」との話を持ち込む。熱心な親は、それでもお金を出す。さらに、紹介先の高校からも謝礼が振り込まれるという寸法だ。場合によっては、「特待にしてやるから、浮いた分をまわすように」との話を持ちかけることも

あるという。(同書九一〜九三ページ要約)

「先」にある問題とは、上位組織がプロ野球につながっているということである。これは、上位にJリーグを持つサッカーとの比較を通じて、問題が明らかになる。

それぞれのトップ選手同士を比較すると、野球とサッカーは、入団時の契約金の〇の数が二桁違う。Jリーグの新人選手支度金(契約金)は、「Jリーグ支度金支給基準規程」によれば、独身者の場合、上限で三八〇万円(妻帯者・扶養家族ありの場合でも五〇〇万円)と決められている。一方、野球の場合、「建前上」の契約金の上限は一億円だ。

二〇〇七年に発覚した西武ライオンズのアマチュア選手に対する裏金事件でも明らかになったが、プロ球団は、中学生へのお金による接触も試みている。ブローカーは、選手のプロ入団時の契約金にまで群がる。すなわち、野球は中学生の段階でさえも喰らいつけば、「カネになる」というわけだ。

サッカーでは、裏に多額のお金を回してまで可能性が未知の選手を獲得できるほど、潤沢な資金を持っているチームはない。むしろJリーグは、各クラブのユースチームで選手を育成するという方式を取っている。私立学校の経営面を考えても、冬におこなわれるサッカーの高校選手権では、「出場するだけで数億円」といわれる春夏の甲子園大会ほどの宣伝効果を持たない。甲子園は、二週間にも及ぶ大会期間中に、主催の朝日新聞が連日三面以上を使って報道し、NHKが全試合を全国中継するという日本の一大スポーツイベントなのだ。すなわち、野球と比べ、サッカーには、選手を食い物にするお金やブローカーは介在しにくいのである。

他のスポーツに至っては、いうまでもない。いくらプロ契約と言っても、組織の興行基盤が確立されていないので、よほどタレント性があり、強力なスポンサーとの契約を結んだり、CM出演などの広告料が入るごくわずかな個人選手でない限り、いくらのお金も発生しない。土台がアマチュアの延長で、人気が出るのはそのスポーツではなく選手個人でしかない。競技が盛り上がったとしても、それはあくまで一過性に過ぎないからだ。

だからといって、野球において、たとえばプロ球団に下部組織を設け、ジュニア世代の選手を育成するシステムやクラブチームを作ることとはできない。それは、いわゆる「プロアマ規定」の存在ではなく、高校野球に甲子園大会があるからだ。野球少年にとつての夢は、「プロ野球選手」であると同時に、「甲子園出場」である。この野球界における絶対的な伝統と権威、憧憬を併せ持つ「甲子園」を前にしては、その先の未来すら霞んでしまうのである。すなわち、「野球」だけ「は特別」なのだ。他のスポーツと一緒にして特待生制度や野球留学を野放しに認めてしまうと、簡単に腐敗してしまう土壌がある。そしてその腐敗の程度が、他のスポーツとは段違いなのである。

【いよいよあつても野球をやることには変わりがない】

切手君の兄・孝太さんは、野球留学こそしているが、特待生ではなかった。高校進学に先立ち、いくつかの学校からスカウトも来たが、最終的には、「自分の希望」でスカウトがなかった日本文理を選んだ。「少しでも甲子園に行ける可能性が高いところでやりたかった」

からだ。小学生の頃、周りの仲間たちが「夢はプロ野球選手」という中で、彼の夢は「甲子園出場」だった。

母の純代^{すんた}さん（四四歳）は、高校進学において孝太さんから相談を受けた時のことを振り返る。

「本人が言い出した時から、『行きたいなら行かせてあげたい』って内心は思っていたんですけど、表面上はずっと最後まで反対を続けたんですね。『きついし、大変だから無理だよ。そんなよそになんかありえない。これはどうするの？ あれはどうするの？ こういう時どうするの？』というところまで含めて、いろいろな面から反対をする理由を一個一個言うことで、本人の意思を確認するみたいなの……。ずっと反対し続けていて、最後は本人の方から、『お願いですから行かせてください』という感じでした」

実際に進学した後、孝太さんは弱音を吐くことがなかったという。それでも、後になって他の選手のお母さんたちから、「こうだったらいいよ。ああだったらいいよ」と、辛かったという話を聞いて、「あ、そうなんだ。でも本人は何にも言っていない」ということがこれまでにあったそう。

「やっぱり一年生の時とか、それは私がそういう風にしちゃったんだって逆には逆には思いましたね。弱音を吐けないような状況にして送り出してしまった。それだけ決意をさせて行かせるのは大事なんだと思いますけど、そこにやっぱりどこかには、弱音がちよっと親には吐けるような部分も残してやらなきゃいけなかったのかなというところは反省をしています」

孝太さんにとって、新潟県は縁もゆかりもない土地である。「新潟の人は、自分から話し掛けてくるタイプの人が少なく、最初はどう接していいかわかりませんでした」と、まずは県民性の違いに戸惑った。

「不安もあったが、自分で望んで行った高校だし、いろんな人が応援してくれたので、口には出さず、前向きに考えていた」というが、もちろん一言で片付けられるほど簡単なことではなかった。家族や友達と離れての見知らぬ土地での生活、洗濯など身の回りのことも全部自分でやらなければならないという環境の中で、練習以上の大変さがそこにはあった。

そんな野球留学について、卒直な気持ちを尋ねた。

「その高校で野球がやりたいとか、甲子園に行きたいからという思いでやるのはプラスになるし、それで甲子園に出られれば、大きな財産になります。県外であっても、野球をやることには変わりはないと思います」

東京を離れて一年半が過ぎ、生活にもだいぶ慣れたそう。オフの日は、遠出することなく、近所のスーパーで買い物をして、寮で休養している。「県外人の自分を受け入れてくれるいい仲間に恵まれた」と語る。

切手君に、同じく「野球留学についてどう思うか」と尋ねてみた。

「お兄ちゃんも野球が好きで、自分が行きたいところに行ってやっています。自分がやりたいうことができれば、抵抗はないです」

夢は、「今のチームで全国制覇」することだ。高校は「全国どこでも構わない」から、甲子園に出場したいという。

「もしプロに行けたら行きたい。そして、お兄ちゃんのように、お父さんとお母さんにお礼

がしたいです」

【それぞれの思いから】

切手君たち一年生が、ネットの上に大きな青シートを乗せた急ごしらえのテントで昼食を取っていると、再び二年生同士の第三試合が始まった。しかし、雨のためほどなく中止となった。時刻も午後二時半を回っており、この後、等々力に移動しての練習もない。ランニングコースにも水溜りができてきた。グラウンドは海から遠くなく、そこから飛来するウミネコが増えてきた。三〇〇羽くらいいるだろうか。

練習は午後三時に終了した。

帰りは着替える予定だったが、雨のため泥がついたユニフォームのままの帰宅となった。野球バッグはパンパンに膨れている。「ここまで濡れたから」と、切手君は傘も差さない。バスの中では、帽子のひさしから水が滴り落ちた。

途中まで帰り道が一緒の友達と、期末試験のことなどを話している。武蔵小杉の駅に到着すると、ユニフォームを着た他の野球選手数名とすれ違った。この雨のため、練習を切り上げたのである。

帰りの車中、切手君で最後になった今回の取材を振り返った。

先述したように、私は現在、新宿区の区立児童館に勤務している。児童指導ももう一〇年近くになる。〃今時の子ども〃は理解しているつもりだ。不要に純粹さや可能性を求めたり、子どもを美化して考えるほど、現実を知らないつもりはない。しかし今回、三人の中学生、そして指導者や保護者などへの取材を通して、私にとっての新しい発見があった。

新宿リトルシニアの栗山君からは、「周りの人や地域への思い」が伝わってきた。

落合第二中学校ソフトボール部の深澤さんからは、「仲間と共有した悔しさ」を知った。

そして川崎中央リトルシニアの切手君からは、「家族のつながり」を感じた。

都会の少年たちが、環境の困難さを克服してまでスポーツに挑戦する原動力となる思いは、「好き」という一言では片付けられないものだった。「犠牲や代償を払ってでものめり込んでしまうもの」の一端が、ここに垣間見えた。

のめり込んでいるのは選手だけではない。彼らを取り囲んでいるすべての人間がまたそうである。正しく言えば、大人たちはスポーツではなく、スポーツをしている子どもたちに魅せられているような気がした。

今回の取材を通して、いずれの人からも「成長」という言葉が聞かれた。成長とは力強さだと思う。これは、大人がとかく失いがちな自分自身のために努力する力、そして後先を打算することなく物事に挑戦するために必要な力である。もし、子どもに夢を持たせることが大切だというのであれば、それは、そこに生きていく上での力強い意思を体现できるからな



のではないだろうか。大人が子どものために必死になって守り、支えていくものの根幹が、そこにある。

切手君たち選手が雨の中で昼食を取るためのテントを、ずぶ濡れになりながらも懸命に張っていた大人たちの姿が、何より印象深かった。

【野球少年と黄昏】

新大久保駅で降りて、自転車に乗り換えた。切手君は、しきりに「寒い」を連呼する。薄手のウインドブレーカは、濡れて防寒の機能を果たしていない。「風呂を沸かしておいて」と自宅に連絡を入れた。帰ったら、真っ先に飛び込むそうだ。自宅が近くなり、緊張も解けたからか、だいぶ口数も増え、いつもの切手君に戻っていた。

「今日は、雨で終わりになってよかったよ。もし続いていたら、今日の試合内容と練習態度だとコーチにかなり怒られて、この後、もっと厳しい練習になってたと思う」

午後四時三〇分、自宅へ着くの見届けた。雨のせいもあつてだろう、空はすっかり暗くなっていた。

私は、雨の中を帰る。ここからさらに四〇分、杉並区まで自転車を漕いで行く。



※日本学生野球憲章第十三条 「選手又は部員は、いかなる名義によるものであっても、他から選手又は部員であることを理由として支給され又は貸与されるものと認められる学費、生活費その他の金品を受けることができない」